

研究推進校事業報告書

〈取組の成果とポイント〉

- 教師が「考え、議論する道德」を念頭に置き、授業をつくっていく過程や授業を展開していく際の流れを知り、工夫していった。外部講師をお招きし、生徒全員が考えることができる授業方法を学び、各教師が実践を行った。その結果、日本語が難しい外国籍生徒を含む生徒全員が、課題に向き合って取り組む姿が見られた。また、教師自身も道德科の授業への自信をもつことができた。
- 道德教育を学校全体で行うにあたり、一人一人の教師が個別に行うのではなく、家庭・地域・生徒間・教員間でつながりながら進めていった。保護者が参加する道德授業、教員同士が授業を見合う実践などを行った。その結果、生徒が一人の教師からだけではなく、多様な学びを得ることができた。教師にとっても同様に、他者から多様な学びを得ることができた。

1 研究推進校の概要

| 学 校 名 | 所 在 地 | 電話番号 | 生徒数 | 備 考 |
|-----------|--------------|--------------|-------|-----|
| 豊橋市立東陽中学校 | 豊橋市岩崎町野田 1-2 | 0532(62)8116 | 532 人 | |

2 研究課題

地域の特色を生かした学校における道德教育の取組

3 研究主題とその設定理由

(1) 研究主題

よりよい生き方を実践する力を育む道德教育の充実
ー地域の特色を生かした道德教育の推進ー

(2) 主題設定の理由

本校では、令和6年度、「未来を見据え、自他ともに認め、輝き合える生徒の育成」を主題とし、校内現職研修に取り組んだ。他者との共感的なかわり合いの中で理解や考えを深められるよう、個を生かし、互いに認め合える授業実践に向け、発問や板書の工夫、効果的なかわり合いの姿について研究を進めてきた。

しかし、令和6年度に行った全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答は71.8%（全国比－4.4ポイント・県比－2.8ポイント）であった。「道德の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか。」という質問に対し、同82.5%（全国比－9.2ポイント・県比－6.0ポイント）という結果が見られ、いずれも全国平

均・県平均を下回った。これは、本校が学校経営における重点努力目標の一つとして挙げている「考え、議論する」道徳の授業について、校内で教員同士が学ぶ機会が十分でないこと、経験の浅い教員が道徳において授業力向上が図られていないことが原因であると考えた。

また、先の質問紙調査では、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答は 77.1%（全国比+3.0 ポイント、県比+1.0）という全国平均や県平均を上回る結果が見られた。これは、令和 6 年度から教育目標に「地域とともにある学校」を掲げ、地域の協力を得ながら生徒の奉仕活動の機会や活躍の場を広げたことに起因するものであると考えた。

上記の実態より、過去の研究の課題と地域とのつながりを軸に、「考え、議論する道徳」につながる指導方法・評価方法の在り方の工夫・改善に取り組み、教員の指導力向上を図っていきたいと考えた。また、現在ある各行事や奉仕活動、さらに、地域の特徴である自然や歴史、国際色の豊かさ、共生の必要性について、道徳教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画の中での位置付けを整理し、地域の特色を生かした道徳教育の推進を図っていこうと考え、本主題を設定した。

4 研究の概要

（１）研究の仮説

【仮説 1】

道徳科の授業を構築していくにあたり、教師が「考え、議論する道徳」を念頭に置き、授業をつくっていく過程や授業を展開していく際の流れを知り、工夫していけば、生徒が道徳性を学び、道徳的な判断力、心情、実践意欲を育むことができるであろう。

【仮説 2】

道徳教育を学校全体で行っていくにあたり、一人一人の教師が個別に行うのではなく、家庭・地域・生徒間・教員間でつながりながら進めていけば、生徒が、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことができるであろう。

（２）研究の手立て

【仮説 1】に対する手立て

- ①全員が「問題」を考えられる授業づくり
- ②道徳科の授業における「問い」と「切り返し」の吟味
- ③生徒が「自分事」として考えられる授業展開
- ④思いを大切に「振り返り」の確保

【仮説 2】に対する手立て

- ①「家庭」や「地域」とつながる道徳科の授業づくり
- ②「人」と「人」とが「つながる」授業づくり

本校の職員は、豊橋市内の他の中学校と比べ、大変若い。担任をもつ教員は、ほとんどが 20 代若しくは 30 代前半である。経験年数が浅く、道徳科の授業に自信をもつ

教員は少なかった。そこで「道德の授業とは何か」「効果的な授業方法とは何か」を教員自身が学び「考え、議論する道德」を展開できるようにしたいと考えた。そのために、上記の手立てを常に意識し、授業を構想していくことを考えた。

また、道德の学びは一人では達成することはできない。そもそも、人間は一人で生きていくことはできない。自分がいて、相手がいて、周りがいて、初めて生きることができる。東陽中学校には、前述したように、100名以上の外国籍生徒が在籍している。その中には、日本語をまだ理解しきれず、授業に参加しきれない生徒も数多くいる。そのような生徒にも、仲間とともにつながりながら、学びを深められるようにしたいと考えた。本校の特徴である「共生」を念頭におきながら、「家庭」「地域」と連携を取り、「人」と「人」がかかわり合うことを大切にしていきたいと考えた。

上記の二つの仮説をたて「よりよい生き方を実践する力を育む道德教育の充実」を目指し、実践を行った。

5 研究計画

| 月 | 実施内容 | 備考 (家庭・地域との連携) |
|-----|---|--|
| 4月 | <ul style="list-style-type: none"> ・現職研修推進委員会（校内研究組織発足、主題・研究（道德科）の方針、研究の手だて等検討） ・道德教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画の検討 ・現職研修全体会 ・授業参観（一斉道德） | <ul style="list-style-type: none"> ・授業参観 ・地域ボランティア ・PTA総会における学校説明 |
| 5月 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒、教員の実態把握①（アンケート実施） ・西川真治先生による模範授業 | <ul style="list-style-type: none"> ・自然体験学習 ・学校評議員会 ・資源回収 ・部活動保護者会 |
| 6月 | <ul style="list-style-type: none"> ・県教育委員会作成の意識調査① ・授業参観の実施 ・第1回校内授業研究会（2年4組） 西川真治先生による研修① | <ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行 ・ビジネスパーク (職業人の話を聴く会) |
| 7月 | | <ul style="list-style-type: none"> ・保護者会 ・地域ボランティア ・健全育成会情報交換会 |
| 8月 | <ul style="list-style-type: none"> ・西川真治先生による道德の授業講話・演習 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域行事参加 |
| 9月 | <ul style="list-style-type: none"> ・第2回校内授業研究会（3年2組） 西川真治先生による研修② | <ul style="list-style-type: none"> ・地域ボランティア ・地域行事参加 |
| 10月 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業（学校訪問） ・授業を見合おう月間 | <ul style="list-style-type: none"> ・東陽祭（学校祭） ・合唱コンクール ・福祉体験学習 ・マナー講座 |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・第3回校内授業研究会（1年3組） 西川真治先生による研修③ ・愛知県道德推進会議 研究推進校視察 | <ul style="list-style-type: none"> ・職場体験 ・健全育成会情報交換会 |

生徒は授業を受け、「みんな、それぞれ、違うから、自分の考えに自信をもって生活→生きていくことが分かりました」などの思いをもった（資料2）。様々な人とかかわり、思いを深める様子が見られた。また、保護者のアンケートからも、大人の思いを聞く機会を設けたことに肯定的な意見が多く見られた（資料3）。

（2）西川真治先生による模範授業

5月22日、豊川市で長年道德教育を牽引され、愛知県教育振興会作成「明るい人生」の編集にも長く携わってこられた、元校長の西川真治先生をお招きした。そして、全職員で、西川先生の模範授業を参観した。2年4組教室でB-(6)「思いやり」の内容で「カーテンの向こう」の授業を行っていただいた（資料4）。



授業の導入では「本当の思いやりってどういうもの？」という投げかけから始まった。「両方がうれしい。」「心の底から助け合える。」などの発言が生徒からあった。その後、全文を範読し、内容を確認した後、主発問「外の様子を見ていたヤコブは幸せだったのか、不幸せだったのか。」という発問を生徒に投げかけた。生徒たちは西川先生の指示で「幸せ」か「幸せではない」かを選択し、各自でネームプレートを黒板に貼りつけた。日本語が難しい外国籍生徒複数人を含む生徒全員が黒板にマグネットを貼った。そして、その理由を考えていった。その後、西川先生が、挙手と指名を併用して、生徒たちの考えを聞いていった。学級の大多数の生徒が発言することができ、その中には、今まで道德の授業で発言できなかった生徒も多く含まれていた。そして授業の終末には、導入と同じ発問「本当の思いやりってどういうもの？」と問いかけ、振り返りを行った。

初めて会う先生、多くの先生に見られる状況にもかかわらず、前向きに授業を行う生徒の姿に「考え、議論する道德」の授業の価値を改めて感じられる授業であ

豊橋市立東陽中学校 道德研修会資料

いろいろな場面について知ることが大切ですが、私たちは毎週の道德の授業をまずは工夫して成立させる必要があります。その時の発問づくりの視点について紹介します。

道德の発問づくりの演習

考え、議論する道德

発達の段階に応じ、答えが一つではない道德的な課題を一人一人の子供が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道德」「議論する道德」へと転換を図る

「正直」を考える授業をします。みなさんは、どんな発問を考えますか？

太郎さんは、花子さんに正直なことを言うべきだと思います。

※この教材で、発問を考えてみます。パターンであてはめてみます。

- 太郎さんは、どんな気持ちでしょうか。（山場で主人公の気持ちを聞く）〈こういう発問をオープニングエスチョンといいます〉
- 太郎さんは、どうする（何と言う）と思いますか。（主人公の行為の予想をする）
- 太郎さんは、「しよっぱい」と言った方がいいでしょうか。言わない方がいいでしょうか。（クローズドクエスチョンで聞く）
- 太郎さんは、何と言ったらいいでしょうか。（問題解決の方法を聞く）
- あなただったらどうしますか。（自分のその場面での行為を考える）

発問と自分の考え

①→②→③→④→⑤
太郎より 自分より

①は太郎さんよりです。この場合は太郎さんのフィルターを通して意見を言うので、言いやすくなります。②は行為の予想です。この場合は教材を切る必要がある場合があります。（今日の授業の「私はこのあとどうすると思いますか」という発問はこのパターンです）まだ、ずいぶん太郎さんよりです。③はクローズドで立場を明確にして、意見を聞くことになります。かなり自分よりになります。（自分の価値観を前面に出します）どこに身を置くかよりも、その理由が大切になってきます。④は「問題解決型の発問」です。どういう対応がいいのか、納得解を探していくやりかたです。（方法論に陥ってしまうと、価値を考えることにならないので注意が必要です）⑤は、完全に自分よりです。この発問の型は本音でも言いにくくなり、以前は敬遠されていました。今は内容に応じて、この発問でも良いと言われています。どちらにしても、クラスの状況や教材の内容に応じて自我関与や多面的・多角的に考えることができるように、柔軟に考えいくことが必要です。

資料5 発問づくりの視点 資料

った。

授業後に行われた教員向けの講話で、西川先生から「授業の構成の仕方」「発問づくりの視点」を御教授いただいた。日本語が難しい生徒でも、授業の構成や発問の仕方次第では、ともに学ぶことができることも教えていただいた。(資料5)。東陽中の教員、特に経験年数の浅い教員にとって、道德の授業の方向性がわかり、授業の礎を築くことができた。

(3) 第1回授業研究会

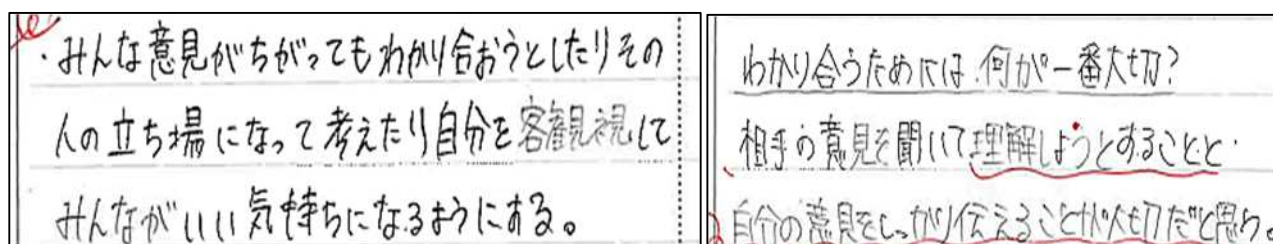
6月16日、第1回授業研究会を開催した。西川先生にお越しいただき、日本語が難しい外国籍生徒を含めた全員が、課題に向き合い、意欲的に考えられる授業を目指して実践した。2年4組にて、B-(9)「相互理解、寛容」の内容項目を取り扱った研究授業を行った。

導入では「人と人とは完全にわかり合えるか。」ということを生徒に問い、数値化して考えるように促した。本文を中盤まで範読した後に途中で止め「このあと主人公はどうすべきなのか。」という主発問を生徒に投げかけた。その後、主人公の湊が「今までどおり」か「何か対策をとる」のかの二択で生徒が選び、ネームプレートを黒板に貼るよう指示をした。西川先生より教えていただいた方法を用いた結果、全員の生徒が何かしらの意思をもち、表現することができた(資料6)。振り返りからは「みんな意見がちがってもわかり合おうとしたりその人の立場になって考えたり自分を客観視してみんながいい気持ちになるようにする。」「相手の意見を聞いて理解しようとする」と自分の意見をしっかりと伝えることが大切」という思いを多くの生徒がもったことがうかがえた(資料7)。

自分の意見をもち、その上で他者の思いを聞くことで、それぞれの思いがあることを知り、それぞれの思いを尊重していくことの大切さを生徒は学ぶことができていた。



資料6 全校授業研究会①風景



資料7 全校授業研究会① 生徒振り返り

(4) 地域とつながるボランティア活動

東陽中学校は、生徒が主体となって活動することを大切にしている。服装などについては「校則」はなく、過去の生徒が作り上げた「東陽中の約束事」として示している。変更をしたければ、生徒総会にて意見をあげ、生徒が話し合っ



資料8 納涼祭後ボランティア風景

をして、開催している。

C-(16)「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」やD-(20)「自然愛護」の授業では、「大人になってもふるさとである東陽校区がすてきであってほしい。(3年)」「校区には自然がたくさんあるから、自分も大切にしていきたい。(2年)」などの振り返りが見られた。

今年度も生徒会執行部がボランティアへの活動を全校へ呼びかけた。地域の祭り「多米納涼祭」の翌日の清掃作業には、夏休みにもかかわらず、昨年度の倍以上の生徒が参加し、清掃活動を行った(資料8)。東陽中学校南側に位置する「利兵池」の530運動では、土曜日に本校生徒の約半数程度が自主的に集まり、地域の方とともに、ごみを拾った(資料9)。また、PTA主催の資源回収では、自主的に学校に集まり、保護者とともに段ボールや新聞紙をまとめる姿が見られた(資料10)。どのボランティアでも、活動後の生徒たちは充実感と満足感で笑みがこぼれていた。今後も生徒会は、12月に地域の神社や公園の清掃活動を行いたいと考えており、準備を進めている。

生徒の心の中には「地域とともに、地域の環境を守っていきたい。」という心が育っているように感じられる。

(5) 授業のつくり方を学ぶ

8月21日、西川真治先生をお招きし、「道徳教育・道徳科の授業で大切なこと」という題目のもと、全校教員向けに、講義・演習を行っていた(資料11)。前半の講義では、そもそも「道徳教育」と「道徳科」の違いは何か、「多面的・多角的」とは何か、道徳の評価はどのように行っていけばよいかなど、基礎的な部分について確認し、全教員での共通認識を図ることができた。

また、すぐに生徒の変容を求めない「道徳は漢方薬」という言葉もいただき、今後の道徳教育の重要なポイントの一つとしておさえることができた。後半の演習では、D-(19)「生命の尊さ(ゆりちかへ)」、B-(8)「友情、信頼(みんなで跳んだ)」の授業のつくり方を考える演習を行った。導入、中心発問、切り返し、まとめなどをどのように行うか、教員間で意



資料9 利兵池 530 運動風景



資料10 資源回収風景



資料11 西川先生 講義受講風景

※クロズドクエスチョンについて

道徳の教科書の教材の多くは、ある程度方向性が決まっている教材が多いと感じます。そういった教材を授業化していくときには、かなり頭を悩ませます。方向性が決まっているので、生徒の内面に深く切り込むことができないからです。私は、授業をするとき、まず、クロズドクエスチョンの発問で聞えないか考えます。と説明してみます。

道徳の発問に限らず、発問には大きく分けて、オープンクエスチョン(拡散的発問)と二つの答え(または三つ四つ)にしばられるクロズドクエスチョン(収束的発問)があります。ただ、多くの意見を引き出すことが目的ならオープンクエスチョンが有効です。一つのことに深く関わらせるならクロズドクエスチョンが有効です。クロズドクエスチョンは答えが限定されているのですから、誰でもどちらかの立場に簡単に身を置くことができます。身を置くということは、理由を考えなければなりません。この形の発問で、全員を授業に巻き込むことができます。(今日私がした授業で取り入れた「ヤコブは幸せか幸せでないか」「このあと私はどうするでしょうか」などの発問は、クロズドクエスチョンを意識して作っています)この発問では「AorB」「ヤコブは幸せか幸せでないか」を選択し、その理由を考えることによって、「C」「思いやりの本質を考えること」という教師が求めていることに迫ろうとしています。(私は中学校の道徳の授業で、この方法を多用してきました)(道徳以外の話し合いの授業に応用できます)

| | オープンクエスチョン (開いた発問) | クロズドクエスチョン (閉じた発問) |
|----|---|---|
| 形 | 5W1H(What, Where, When, Who, Why, How)の形をとる発問。 | 賛否(イエス/ノー)、選択、比較を促す発問。 |
| 例 | 「あなたはどこに住みますか?」「なぜそう考えるのですか?」「どうしたらよいでしょう?」 | 「この意見に賛成しますか?」「どの考えを支持しますか?」「どちらが優れていますか?」 |
| 活用 | ファンリテーターの読解力が強く、考えて話せたいとき 自分の意見を述べたいとき 新たな情報が必要になるときに使うと効果的である。 | ファンリテーターの読解力が強く、結論をしたいとき 話を聞いてほしいとき 心を切り替えたいときに使うと効果的である。 |

図1-1 2つの質問の違い

資料12 発問の仕方 資料

見交流をし、西川先生ならばどのように授業を行うかを、御指導いただいた。特に発問の仕方「オープンクエスチョン・クローズドクエスチョン」のお話をいただいた（資料12）。クローズドクエスチョンという発問の仕方は、外国籍が多い本校において、全員が自分事として考えられるよい手立てとなることがわかった。

最後に、本校教員の「道徳の授業で悩んでいること、質問したいこと」に答えていただく時間を設定した。特に若い先生から出された悩みや質問に対して西川先生から助言をいただいた（資料13）。

夏休みに授業のつくり方を学び、悩んでいることや質問したいことを聞くことができ、2学期以降の授業に生かしていきたいと、多くの教員、特に経験年数の浅い教員が思うことができた。

Q：どうしても、発問が国語の読み取りのようになってしまう。

A：道徳は、答えは自分の心の中にある。本文から読み取る必要はない。状況に応じて、途中で道徳の教科書を閉じるように指示しても構わない。

Q：生徒の意見が、一部の生徒の意見に流されてしまう。

A：それをこえていくための「本音」を言えるようになることが大切。全員で達成することの価値を共有できるようにしたい。そのためには「教師の語り」の時間も大切。

Q：グループ活動は道徳では有効な手段なのか。

A：周りとは相談して自分の考えをもつことは必要。しかし、グループで1つの答えを導くことはナンセンス。道徳は自分自身の心に問いかけるものだから。

資料13 道徳授業

Q&A(一部)

(6) 第2回授業研究会

9月4日、3年2組にて第2回全校授業研究会を開催した。内容項目はD-(19)「生命の尊さ」で教科書教材「避難所での出来事」を扱い、授業を行った（資料14）。

避難所で息子が苦しんでいるが、周りの人は誰も車を貸してくれなかった。やむにやまれぬ父は、鍵がついたままの他人の車を勝手に借り、息子を病院へ送った。このような内容に対し、「この父親の行動は、ありか、なしか」という発問を生徒に投げかけ、考えるように促した。西川先生に教えていただいた発問の方法のうちの「クローズドクエスチョン」を使ったこの発問により、学級全員が、「あり」か「なし」かを考え、自分の意思表示をすることができていた。ある外国籍生徒は「あり」と「なし」の中間という意思表示をした。「ありの気持ちもわかる。なしの気持ちもわかる。」という理由のため、そのような答えになったとのことだった。道徳として、この考え方は間違いではない。夏休みの講義でも、西川先生は「道徳の答えは自分の心の中にある。」ということをおっしゃっていた。生徒なりに自分自身と向き合い、考えた、何よりの結果であろう。



資料14 全校授業研究会②風景

2.ふりかえり
命より大切なモノはないと思います。命がないと何もできなくなると、他の人の命としても、一つの大変な命だから守らなければいけない) と思いました。誰かの命がなくなったら、絶対がなしで人がいなくて、他人事としてみてはいけない)と考えました。

結果だった。そこで、道德の授業を振り返る学級通信を、不定期に発行する取り組みを行った。もともと学級通信を多く発行する学級もあればあまり発行しない学級もある。また、無理につくっても、続かなくては意味がない。よって、できる学級で無理なく、道德の取り組みを学級通信で保護者に紹介するようにした。

1年1組は、道德の授業の内容や生徒の振り返りを、学級通信にて随時紹介している（資料17）。授業の内容や板書を書き、生徒の感想をのせ、各家庭へ配付している。生徒自身も自分の振り返りが通信にのることに前向きな気持ちをもっている。この学級通信が、家庭での道德の話題へとつながり、家族とともに考えていく道德教育の一助になればと考える。



資料17 道德授業の学級通信

6 研究の評価

(1) 研究の成果

若い教員、100名以上の外国籍生徒、豊かな自然、生徒主体の活動。これら本校の特色を生かし、家庭や地域とつながりながら、道德教育の充実を目指して、研究を進めてきた。西川真治先生から学んだことを念頭におきながら授業を進めることで、学級全体で考える姿、「問い」「切り返し」を大切にした発問、生徒が他人事ではなく自分のこととして考える授業、今後に生かす振り返りができるようになってきた。また、教員の力だけではなく、家庭の助言があったり、地域とともにつながっていったりすることで、生徒の道德性はより一層育まれているように感じる。

生徒用アンケートでは『『道德科』では他の人の考えを聞きながら、自分のことについてよく考えている。』という質問に対し「そう思う」という回答が、年度初めの41%から47%に上がった。また、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心で他に学び、自らを高めることができる。」に対し「そう思う」という回答が、年度初めの22%から、62%と、大幅に上がった。生徒が自分の考えや意見をもった上で、考え、議論する道德を実践できた結果と考えられる。

結びに、生徒から「道德の授業が楽しい。」という声が多く聞かれるようになった。教師と生徒も一生懸命に取り組んだ何よりの結果だと考えられる。

(2) 今後の課題と取組

「よりよい生き方を実践する力を育む道德教育の充実」を目指し、実践を行ってきた。しかし、単位によっては、まだまだ生徒にとって難しいと感じるものもある。今後も、生徒のための道德教育を家庭や地域と連携しながら、地域の特徴を生かしながら進めていきたい。また、この取り組みが一過性になってしまっては意味がない。これからもより一層の道德教育の充実を目指して、精進して取り組んでいきたい。